

芙蓉の新風

<http://npo.fuji3776.net/>

INDEX

巻頭言 新たなステージを迎えて	1
寄稿1 「来た、見た、測った」から、持続可能な測候所へ	2
夏期研究/活用報告	3
2010年の活動記録	4,5
助成/委託によるプロジェクト	6
寄稿2 日本でいちばん高い住まいに暮らして	7
成果報告会ほかお知らせ	8



富士山山頂部は、その標高ゆえに年平均気温が -6°C 前後であり、永久凍土がまとまって存在しうる本州で唯一の場所である。信州大山岳科学総合研究所の池田グループが、山頂付近に深さ10mの地温観測孔を掘削することに成功。観測孔内に温度センサーを設置し、地温の連続モニタリングを開始した。深部までの地温断面を気象要素とともに直接観測し、地温変化の支配要因を明らかにし、永久凍土の動態や分布を評価する。2年後には富士山初となる永久凍土の直接観測結果が出る予定だ。

新たなステージを迎えて

会長 中村 徹



当NPO法人は、2010年4月、富士山測候所の借用について気象庁との新たな3カ年の契約を締結しました。第2ステージとなる今回の契約では、借用期間も9月10日まで延長されたほか、冬期借用エリアが拡大され、通年観測も視野に入れた観測研究の基盤整備がなされました。

迎えた同年の夏期観測は、比較的安定した天候にも恵まれ、参加者は前年夏を上回る過去最高の延べ467人に達しました。前年の国環研に続き放医研が通年観測に挑み、無線LANで山頂の観測データを送信し続けるなど、観測研究はこれまでの経験を生かして確実に進化しています。また、これらの研究成果は、国内外の学会などで発表される機会も多くなりました。

一方で、活動のエンジンともいえるべき資金については、6月に決まったカーボンオフセット年賀寄附金のほかは、不確定要素をかかえたまま夏の観測研究を迎えたため、研究者には大きな負担を強いることになりました。しかし、9月に入ってから複数年にわたる三井物産環境基金の助成採択が決まり、ここきて支援の輪が広がりをみせつつあります。われわれの活動が社会に認知されてきた証左ともいえ、わがNPO法人にとってこれ以上の励みになるものはありません。

今後の会の活動を進めるにあたっては、老朽化した山頂施設の維持管理を含む設営のために、今後とも資金の確保が必要です。また、環境省や地元自治体等との連携協力も不可欠です。第2ステージの端に立ってまいこそ、中長期を視野に見据え、国内外に開かれた研究活動拠点として富士山測候所が有効活用されるよう、関係者の皆さまとともに努力を続けていきたいと考えています。

「来た、見た、測った」から、持続可能な測候所へ

兼保直樹（産業技術総合研究所）

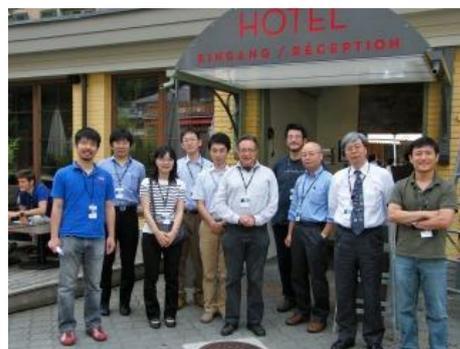
NPOによる富士山測候所の夏期運用も昨夏で3年目となり、一夏の間研究・調査・教育活動等を行った利用者数も、今時珍しい「右肩上がり」が続いています。これは喜ばしいことですし、今にも測候所が取り壊されてしまうかもしれないという危機感に突き動かされていたNPO設立時の状況からすると、かなり状況が好転してきているのではないかと、との錯覚さえしかねません。

しかし、冷静に考えてみると、富士山測候所の置かれている状況は基本的には悪化の方向に進んでいることを認識させられます。その主なものを改めて挙げてみると(1)測候所運営のための財源は、基本的には民間財団(○△基金といった)に応募し3年なりの期限付きで獲得できた資金により自転車操業している状態であり、3年後の応募では「落選」して、そこで万事終わりになる可能性を絶えずはらんでいること、また(2)富士山頂という条件の厳しい場所で人が活動するために不可欠となるインフラ、すなわち、麓からの送電線に経年劣化や大風等で毎年小規模な損壊が生じており、もし、雪崩や山体崩落によりひとたび大きな損壊が生じた場合、現在のNPOの資金的体力では、元の状態に再建することは、まず無理だろうということです。

幸いにも今後3年程度については、とある財団の基金から助成を得ることができたことから、従来型の夏に人がワーと登ってドーと活動して、秋になるとサーと降りてしまう夏祭り型の活動を続けることは可能になりそうな気配です。しかし、山頂で研究・調査・教育活動を行っている人は、夏が近

づくると山頂での仕事の準備で頭と体が一杯となってしまう、実際に夏になると自分の活動に夢中になって、秋には事務局などの活動サポート側もヘトヘトになってしまいます。そのなかで、新たに活動に参入してくる人やグループが山頂での特殊事情を認識していないための軋轢が生じたり、また年々増加する夏季登山客との軋轢も増えるかもしれません。そんなこんなで、3年程度はあっという間に過ぎてしまうでしょう。

今後の3年間については、たまたま獲得した財団の資金を使って従来型活動を回すことにアップアップとなるのではなく、たとえば10年後も20年後にも、富士山測候所が研究・教育のステーションとして持続するための基礎作りをしなければならぬと考えます。それは何かといえば、つまらない話ですが、やはり(1a)当たり外れに依存しない継続的な資金源の確保、特に、富士山頂・日本最高所という看板をうまく利用したスポンサー探しであり、その裏返しとして、定常的な運営経費の削減の方策を探ること、(2a)電気の確保については、壊れた電線を直し続けるといった対応から一歩踏み出して、具体的には一部実用レベルの自立電源の確保を少しずつでも進めていくことです。この自立電源の確保は、山頂での通年でのデータ取得という、測候所の地理的優位性を本質的に発揮するための将来の活動にも繋がっていくものでしょう。そして、(1a)と(2a)を別々のこととしてではなく、一体化して進めることができれば、1つのブレークスルーとなり得るかも知れません。



(写真上)2010年6月にスイスのインターラーケンで開催された山岳における大気物理化学研究ACPSシンポジウムの日本側参加者。右から3人目が筆者。

(写真左) 通年観測のために、自立電源である太陽光発電パネルを用いた大気測定機器の運用の可能性を探るためオゾン計の運用実験を行った。太陽光パネルは3号庁舎の北側に位置する貯水槽の上に取り付けられた。

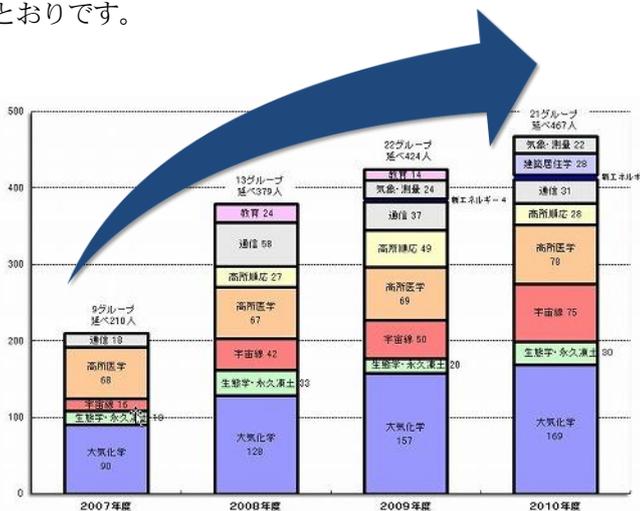
天候にも恵まれ、3年連続で前年を上回った参加者

2010年度 富士山測候所における 夏期研究/活用報告

比較的天候に恵まれた2010年は7月12日から8月30日まで50日間にこれまで最高の延べ467人が参加しました。

学術科学委員会では、2010年1月末日までに公募した研究課題について、研究の内容と安全性の観点から審査を行い14題を採用しました(実行段階で都合による取り止めが2件)。これらの研究は海洋研究開発機構(JAMSTEC)との共同研究、国立環境研究所および新技術振興渡辺記念会からの委託研究と並行して行われました。

活用委員会および教育・登山委員会では、公募した課題について、研究内容と安全登山実現への貢献度、実現可能性などの観点から総合的に審査し、4題を採用しました。本年行われた研究活動、活用活動はそれぞれ表1、表2のとおりです。



測候所での研究・活用活動の参加者数推移

表1 学術科学関連の研究活動

1	富士山頂におけるPM2.5エアロゾル粒子の動態解明および反応性測定 金谷有剛、竹谷文一(海洋研究開発機構)兼保直樹(産業技術総合研究所)
2	富士山頂での夏季のオゾン・一酸化炭素の特性 加藤俊吾(首都大学東京)
3	独立電源による富士山頂における通年二酸化炭素濃度観測 向井人史、野尻幸宏、須永温子(国立環境研究所)
4	富士山体を利用した自由対流圏高度におけるエアロゾル-雲-降水相互用の観測 大河内博(早稲田大学)、皆巳幸也(石川県立大学)、片山葉子(東京農工大学) 米持真一(埼玉県環境科学国際センター)
5	富士山頂におけるエアロゾル粒子と雲凝結核の測定 三浦和彦(東京理科大学)、小林拓(山梨大学)
6	富士山頂における新粒子生成の観測 キャリン・セレグリ(物理気象研究所フランス国立科学研究センター)、松木篤(金沢大学)
7	富士山を観測タワーとした大気中水銀の長距離輸送に係わる計測・動態・制御に関する研究 永淵修(滋賀県立大学)
8	富士山頂における有機エアロゾルの組成に関する研究 河村公隆(北海道大学) Jost Heintzenberg (Leibniz-Institute for Tropospheric Research (IfT))
9	高高度宇宙線環境のリアルタイムモニタリング 保田浩志(放射線医学総合研究所)
10	中高年登山者における富士登山時および山頂滞在時の生理的負担度の測定評価 山本正嘉(鹿屋体育大学)
11	富士山頂短期滞在時の安静および運動時の脳血流心行動態に関する研究 浅野勝己(筑波大学名誉教授)
12	富士山頂における睡眠時の低酸素症に対する口腔内装置の効果 野口いづみ(鶴見大学)
13	富士山における地温観測孔掘削:永久凍土の直接観測に向けて 池田敦(信州大学)、岩花剛(北海道大学)
14	富士山頂における排ガスマイクログリッド構築の具体化に関する研究 (*新技術振興渡辺記念会受託研究 土器屋由紀子(NPO) 安本勝、佐々木一哉(東京大学)

表2 活用・登山・教育関連の研究活動

1	富士山旧測候所を活用した通信の可能性について 前野貢士(KDDI)
2	マイクロ波帯・ミリ波帯の電波伝搬研究 横尾富夫(横浜アマチュア無線アソシエーション)
3	三次元雨量計の強風環境下における性能検証現地調査 松田益義(MTS雪氷研)
4	富士山測候所の居住環境調査 村上祐資(東京大学)

富士山学校科学講座・無料見学会

今年度は9回の講座を計画しましたが、天候不順で実際に開講できたのは4回だけとなり、高所での開催方法に課題を残しました。講師は小林(山梨大)、三浦(東京理科大)、永淵(滋賀県立大)、村上(東京大)、浅野(筑波大)の5名が交代で担当。8月19日は江戸川大のフィールド研修の一つとして伊藤教授引率の学生一行15名が、21日は横浜市立大の地域調査実習の一環として青(あお)教授ゼミ学生一行20名が夫々団体で参加し、全体では53名の参加を得ました。



富士山測候所を活用する会

1月

TV朝日「奇跡の地球物語」富士山特集でNPOの活動をとりあげ 富士山の観測研究の拠点としての側面を土器屋理事がコメント。(10日)
第3回成果報告会に108名が参加 東京大学小柴ホールで開催。20件の口頭発表のほか、ポスターなど展示。(24日)

2月

山頂庁舎有効利用検討委員会に参加 気象庁主催の山頂庁舎を有効活用するための関係機関による検討委員会が次期貸付方針の提示。当NPOから3年間の利用結果を報告。(5日)
(株)クリエイション様から什器の奇贈 椅子、テーブル等数点を東京事務所に搬入。(17日)

3月

交通新聞コラムに連載開始 交通新聞のコラム「交通評論」に土器屋理事の「富士山頂の利用法」が掲載。月1回の連載開始。(1日)
HPリニューアル 夏期観測に備えHPを全面的に整備、ブログ等コンテンツ拡大。(15日)
全省庁統一資格に登録 役務の提供等(調査・研究、建物管理等保守管理)について競争入札へ参加資格。(16日)
気象庁7月から3か年の借受決定 借受期間9月10日まで延長したほか冬期借受エリアが拡大され、通年観測の基盤整備。(25日)
現状変更の事前説明 夏期観測に伴う現状変更について静岡県教育委員会および沼津自然保護官事務所へ説明。(29日)

4月

72号柱架空線点検 3月20日に富士山麓を襲った落雷を伴う春の嵐で被害を受けた送電線の修理を実施。(7日)

5月

第5回総会で新体制 早稲田大で開催された総会・理事会で定款変更により理事枠を25名から30名に拡大し体制強化、浅野理事長から畠山理事長にバトンタッチ。(15日)
夏期観測直前の学術科学委員会 資金難で危ぶまれていた御殿場基地設置と無線LAN導入を決定。(25日)
山頂設営に関する関係者打合せ 山頂運営経費を削減するため開所期間を短縮8月30日閉所を決定。(26日)

6月

自治体病院協議会薬剤部長部会研修会@静岡岡市で講演 土器屋理事が「富士山測候所のいま」と題して講演。(4日)
カーボンオフセット年賀寄附金交付式でプレゼン 環境省主催の「エコライフ・フェア2010」年賀寄附金カーボンオフセット助成団体に対する交付式で助成19団体を代表して畠山理事長がプレゼン。(6日) **1**
御殿場基地を確保 夏期観測期間中の支援基地として御殿場市内にアパートを賃貸。(8日)

インターラーケン(スイス)で山岳大気シンポジウム 兼保(産総研)、保田(放医研)、三浦(東京理科大)、松木(金沢大)が富士山での観測研究成果を発表。富士山頂大気観測への応援メッセージを受けHPに掲載。(9日-12日)

横浜市立大で総合講義 浅野理事長が「富士山から見た日本の環境」と題して講義。(11日)
御殿場基地に無線LAN工事 保田G(放医研)が無線LANアンテナを設置。(8日)
送電線36号柱折損 倒木により折損した電柱の修繕工事を実施。(21日) **2**

7月

御殿場市・富士宮市・自衛隊など地元挨拶回り 開所を前に地元自治体等に事前説明。(1日)
夏期観測のプレス発表会 東京理科大で開催されたプレス発表で本年の夏期観測の内容を報道関係者にブリーフィング。(5日)
変圧器を設置 前年に気象庁が撤去したPCB入り変圧器の代替となる30KVA変圧器を荷上げ据付設置。(7日) **3、4、5**
開所を前に大気観測の準備で上山 兼保(産総研)、竹谷(JAMSTEC)、関(北大)が上山。午前中はハイボリの設置などを行うも、午後は天候が崩れ下山は強風とアラレに見舞われる。(10日) **6、7、8**



1



3



6



2



4



7



5



8

2010年の活動記録

暴風雨の中で開所 午前10時20分商用電源通電を確認、山頂班が常駐を開始。(12日)
静岡FM放送に生放送出演 島山理事長がアナウンサーの質問に答える形で出演。(13日)
無線LAN開通 保田G(放医研)が設置した無線LANが開通。御殿場方面の無線LAN回線は他の研究チームのデータ通信や山頂班と事務局の連絡用にも提供。(13日)
雨水霧水の集中観測 大河内G(早稲田大)が集中観測を開始。(13日-8月24日)
測風塔に気象測器・雨量計取付 永測(滋賀県立大)、松田(MTS 雪氷研)がそれぞれ気象測器3次元雨量計を測風塔に取り付け。(17日)
イオンカウンター等を設置 三浦(東京理科大)、ジュリアン(フランス)・松木(金沢大)がイオンカウンター等を荷上げ・設置。(17日)
富士山学校科学講座・無料見学会 今夏初めての山頂での科学講座に11名が参加。(18日)
貯水槽上に太陽光パネル取付 兼保(産総研)自立電源によるオゾンデータ測定開始。(20日)
二酸化炭素の越冬測定2年目へ 須永G(国環研)が衛星通信OrbcommからIridiumに切り替え2年目の越冬観測へ突入。(20日)
雷活動に関連する放射線の測定 鳥居(原子力機構)が雷雲からの放射線を測定する検出器を、鴨川(東京学芸大)が電場測定装置を設置。(28日)

中高年登山者の生理的負担度測定 山本(鹿屋体育大)13名が登山。(27日-29日) **9**
山頂データのダウンロードに成功 加藤(首都大東京)、兼保(産総研)が相次いで無線LANで測定データを取得、HPで速報。(28日)
暴風雨で庁舎内雨漏り 1号庁舎山頂班長席付近はバケツで雨水受け。(30日) **10**

8月

1号庁舎室温上昇で機器不安定 過密に設置した機器からの発熱で室温が上昇。小林(山梨大)、関(北大)、山頂班の連携で送風機・ダクトを山頂へ上げ外気を取り入れ。(2日) **11**
山頂に長期滞在・居住環境調査 元南極隊員村上(東京大)が約3週間山頂に滞在。調査の合間に山頂からブログ発信。(6日-27日)
初めての長時間停電 御殿場落雷のため測候所が約19時間にわたり停電。1号柱の遮断機を投入して回復。(18日-19日)
山頂に10m深の観測孔ボーリング 池田G(信州大)が山頂永久凍土を温度センサーで直接モニタリング観測開始。(18日-23日)
富士山学校科学講座に団体参加 横浜市立大の学生が山頂で受講。BSフジが取材。(21日)
宇宙線の越冬観測開始 保田(放医研)が宇宙線の通年観測を目指しインターネット回線を介して遠隔データ取得を開始。(26日) **12**

研究グループの機材撤収 11研究グループが一斉に観測機材の撤収に集結。(25日) **13**
閉所・50日間の夏期観測終了 10時に商用電源を切断、山頂班の常駐も終了。(30日)
BSフジPRIMENEWS生放送に出演 夜8時から2時間番組「世界の富士で先端研究 環境学者が活用を直言」に永淵(滋賀県立大)、三浦(東京理科大)が出演。(30日)
三井物産環境基金に採択 2010年から3ヵ年間の助成決定の通知。(15日)

9月

山頂班山本氏ヒマラヤ山脈で遭難 ネパールダウラギリ峰遠征中の山頂班員山本季生氏が雪崩で遭難の悲報。(29日)
御殿場市・富士吉田市・裾野市挨拶 地元自治体に夏期観測終了の挨拶回り。(30日)

10月

損保ジャパンちきゅうくらぶ様からご支援 損保ジャパン社員有志による寄付金の社会貢献ファンタムからご寄付。(16日)

11月

第33回酸性雨問題研究会 皆巳(石川県立大)、三浦(東京理科大)、小林(山梨大)、片山(東京農工大)、大河内(早稲田大)が発表。(13日)

12月

平成23年度の公募開始 公募締切は1月末。審査結果は3月中旬に申請者に通知予定。(1日)
2010 データ検討会 富士山大気観測グループ20名が参加、15題の発表予定。(28日)

(*) G:グループの略



9



11



12



10



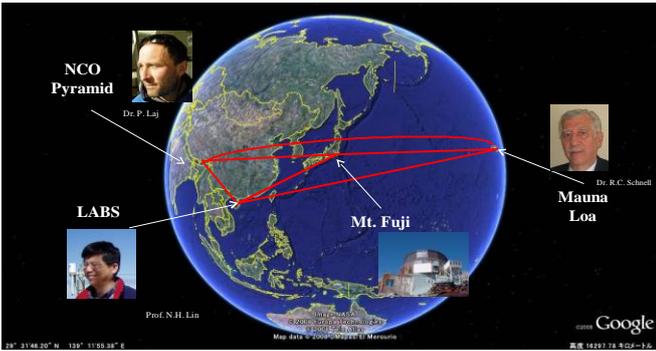
8月25日(水) この日、観測機材の撤収のため、海洋研究開発機構、首都大学東京、北海道大、金沢大、早稲田大、東京理科大、東京学芸大、YAMA会、MTS 雪氷研など総勢21名が山頂に上がった。富士山測候所はこの5日後、8月30日(月)に商用電源を切断し、50日間の夏期観測を終了した。

13

新技術新興渡辺記念会からの受託事業(2008-2010)

富士山頂における 東アジア越境オキシダント 監視システム構築

2008年から受託事業として「富士山頂における東アジア越境オキシダント監視システム構築に関する研究」を①富士山頂におけるクリーンマイクログリッド構築の課題②遠隔操作の可能性③海外3山岳観測地点とのネットワーク構築の可能性の3項目について、それぞれの調査研究を行いました。



東アジア越境オキシダントネットワーク

初年度は①については、山頂の太陽光の強度と日照時間のデータ、強風下の山小屋の例などから、太陽光および風力を使って山頂でオキシダントの測定を行うための必要電力が賙える可能性を示しました。②については無線LANの利用が有望であるとの結論を得ました。③については、図に示すような3地点、ハワイ・マウナロア観測所、ネ

パールNCOピラミッド観測所、台湾鹿林山ベースラインステーションとのネットワークの構築に関する準備会議を行いました。

2年目の2009年度は世界不況による基金の財政悪化にもかかわらず継続が許され、インフラ構築と国際ネットワーク構築の可能性の検討として、山頂の現場テストを行いました。①については一枚のパネルを用いて、太陽光発電による蓄電量の長時間測定を行い、有望な代替電源としての可能性を示しましたが、風力については、設置時や実施時の気象条件のため十分なデータが得られませんでした。②についてはアパートを借用した御殿場基地と山頂の間に無線LANが開通しました。③について、台湾で行われた国際会議に招待されその機会にワークショップを開催しました。

3年目の2010年度にはさらにインフラ構築と国際ネットワークの具体化に向けて、①については4枚の太陽光パネルとオゾンモニターを接続し、35日間の連続測定に成功しました。この間、1時間おきの間欠測定、日射量不足時の切断回路の挿入などのテストを行い基礎データを得ることができました。なお、風力に関しては夏季に登山者が集中する富士山の特殊性を考慮すると安全に運用するのは困難であることが明らかになりました。②については無線LANの実質的な利用が可能になり、無線LAN経由で観測測器の遠隔操作のテストを行い、また、オキシダント、一酸化炭素、黒色炭素粒子等の測定値のセミリアルタイムデータをNPOのホームページに掲載することができました。③については②で公開したホームページデータの海外からのアクセスのテストを行いました。この点で、ホームページの表記法など、いくつか改良するべき点が明らかになりました。このように、富士山頂におけるクリーン電源の確立と無線LANによるネットワーク配信の目途を立てることができました。

以上の結果を踏まえて、ネットワーク参加サイトをさらに増強して、世界の山岳ネットワークを目指し、同時に海外からのユーザビリティの改善を迫及してこの計画を完成させたいと考えています。

(実施責任者 土器屋由紀子)

カーボンオフセット年賀寄付金 2010年度配分事業

富士山測候所を温室効果ガス 通年観測施設とするための クリーンエネルギー使用・ インフラ構築事業

この寄付金は排出権取得・償却(無効化)事業を行う事業者・株式会社アドバンテックと本NPOが共同で計画を提案するもので、地球温暖化防止プログラム(郵政事業株式会社寄付金による助成)としては「富士山測候所を温室効果ガス通年観測施設とするためのクリーンエネルギー使用・インフラ構築事業」を提案しました。

アドバンテック社はインド・ラジスタン州Soda村の風力発電事業によって取得したクレジット(CER: Certified Emission Reduction)および徳島県那賀郡那賀町における森林吸収源事業を行うことによって取得した排出権(J-VER: Japan Verified Emission Reduction)を無効化することによって、この助成金に見合った事業を行います。

本NPOは併行して、表記の事業を行うことで、助成対象として選ばれ、旧富士山測候所を二酸化炭素をはじめとした温室効果ガスの通年測定のできる施設とするために、雷対策と遠隔操作を組み合わせたクリーンエネルギー供給システムを構築し、また山頂管理の基本的なノウハウを体系化することを目的としています。

2010年5月から山頂で作業を行う登山家を雇用し、山頂の設営計画と同時に太陽光パネルによる発電作業の打ち合わせを行い6月には山頂への運搬と作業実施の手はずを整え7月に実行しました。太陽光

パネルに関しては前年度、新技術新興渡辺記念会からの受託事業として行ったデータを基礎に、今年度はさらに枚数を増やし観測機器との結合を屋外で試みたものです。発電量や装置の間断運転、日射量との関係などの基礎データを手し、次年度以降の独立電源の確立への目途を立てました。

また、無線LANによる遠隔操作に関しても既に得られている屋内実験の情報をもとに具体的な作業を行ないました。例えば金沢大学の研究者が遠隔操作でイオンメーターのスイッチの切断、外国出張中の研究者がハイボリウムエアサンプラーの不具合を検知して、山頂へ連絡して調整したなどの事例がありました。

一方、富士山頂の電源維持に関しては気象庁が管理していた時代から雷による被害が最大の問題でした。測候所の屋内の無線LANと屋外の太陽電池発電システムとの結合を行うと被雷によって全ての観測装置が破壊される恐れがあるため、今年度は、結合実験は行えませんでした。来年度以降、新しい接地体系を検討し屋内の施設と安全に結合する試験を行い、通年観測に向けてさらに充実した観測研究環境を構築していく予定です。

(実施責任者 畠山史郎)



徳島県那賀郡那賀町における森林吸収源事業

奇稿2

日本でいちばん高い住まいに暮らして —極地の居住環境を調べる—

村上祐資 (東京大学)



風 風呂桶から溢れる湯量に、しばし目を丸くする。石鹸の泡立ちが悪い。石鹸がもつ汚れ分解能力を、こっちが軽くオーバーしてしまっているのだ。「すまん、すまん。」と心の中で呟きつつも、なんだか嬉しくなって、とりあえず頭から豪快に一杯。お湯が存分に使えるのをいいことに、満足するまで同じ部位をゴシゴシと何度でも洗う。

2010年のこの夏、僕はNPOの研究メンバーとして富士山測候所に約三週間滞在することになった。この三月までは南極観測隊の一員として、南極の昭和基地で一年半暮らしていた。南極では観測調査で頻りに遠征に出かけていたのだが、南極でも富士山でも、長い遠征を終えた後に入る風呂は格別である。

僕の研究テーマは「極地建築」といって、南極や山岳地帯、宇宙など、一般に極地とよばれる場所に生きる人々の、その生活と住まいを調べることである。極限の環境条件に加え、輸送や工期といった厳しい制限のなかから生まれた極地の住まいは、生き延びること以外の不必要な要素が極限まで削かれ、まるで剥き出しの要塞のようだ。しかしその冷ややかな外見とは裏腹に、そこでは住む人と建物とがお互いに助け合いながら共に生きていくという、温かな関係をそこに見ることができる。富士山測候所もまた、富士山という場所で何十年もの間育まれてきた、その温かな関係から生まれた建築だ。その関係をひも解くには、やっぱり自分で住んでみて確かめるのが一番。そういう訳で、南極に引き続き富士山に住むことになった。

富士山一年目の今年は、勝手に分からないなかでの試行錯誤の連続で、研究という面では満足といえる調査結果を残せなかったと思っている。一年目の経験を来年に生かして良い研究成果に結びつけたい。いつか僕の研究が、新しい測候所の暮らしに

役に立つようになれば嬉しい。

NPOのメンバーの皆さんには僕をととても温かく迎え入れて頂き、たくさんのおアドバイスや手助けをして頂いた。山頂と一緒にご飯を食べながらの雑談は、何よりのご馳走だった。初めてNPOに参加させて頂いて強く感じたのは、研究者の皆さんが、自分の研究にだけでなく富士山測候所に対して、強い愛情と熱意を持っていること。予算や運営上の問題解決やNPOの将来に対して、皆さんが主体的に係わっていかうという思いがひしひしと伝わってきた。富士山測候所という場所で、この素晴らしい関係が今後何十年と生まれ、新しい富士山測候所のカタチが生まれることを願っている。研究者の皆さんとNPOの温かい関係を知るには、やっぱり自分もメンバーになってみる事が一番。そういう訳で、微力ながら僕もNPOのお手伝いさせて頂こうと思う。



8月27日、富士山測候所での滞在最終日、浅間大社奥宮前にて

富士山日記



標高3776メートル、日本でいちばん高い住まいから。

富士山特別地域気象観測所、むかしという富士山測候所がいまの僕の住まい。ここは気象庁が2004年秋に有人観測を終えたあと、夏の2ヶ月間だけを「NPO法人・富士山測候所を活用する会」が借りて受けている建物だ。日本でいちばん高いこの場所で、大気科学や高所医療、生態学・永久凍土、放射線科学など様々な研究者が、ここでしか採れない貴重なデータを観測している。加えて、高所傾心トレーニングや青少年に向けての自然体験・教育、無線通信の実験など、標高3776メートルの活用分野は多岐にわたる。僕はというと、研究者の一員として、この建物の暮らしがどのようなものか、住まいとしての性能はどんなものなのかを調べるために、ここに居る。2004年以前は、気象庁の職員は3週間交代でここに勤務していた。だったら僕も3週間ここに住んでみよう。

・・・村上さんが山頂から発信しつづけたブログ「富士山日記」より

成果報告会を開催します

第4回研究成果の報告会を開催します。口頭発表、ポスター発表のほか、パネルディスカッション、企画展示を行います。

日時

2011年1月23日(日)
13:00~17:30 (12:30 開場)

会場

東京大学弥生講堂一条ホール
(東京都文京区弥生 1-1-1)

交通

東京メトロ南北線「東大前」駅下車徒歩1分
(*今年から会場が変更になっておりますので、ご注意ください。)

主催

NPO法人富士山測候所を活用する会

後援

財団法人新技術新興渡辺記念会
郵便事業株式会社

日程

口頭ポスター発表、パネルディスカッション
懇親会 (17:30-18:30 エントランスホール)
(*プログラムはHPからダウンロードしてください。)

入場無料 (ただし、懇親会参加者は1千円)
参加ご希望の方は、所属、氏名、連絡先をEメール(npofuji3776@yahoo.co.jp) またはFAX(03-3265-8297)で事務局までご連絡ください。よろしくお願いいたします。



公募を受け付けています

平成23(2011)年度の富士山測候所における研究計画及び活用計画を公募しています。

申込期限

2011年2月1日(火) 必着

応募資格

参加者は全員NPO法人富士山測候所を活用する会の平成23(2011)年度会員であること。
※正会員(会費1万円)であることが条件になりますが、学生は賛助会員(会費3千円)でも結構です。

応募先

NPO法人富士山測候所を活用する会事務局

応募方法

下記のメールアドレスに計画申請書(Word)および予算計算シート(Excel)を添付してお送りください。

E-mail: npofuji3776@yahoo.co.jp

計画申請書および記入要領

HPからダウンロードしてください。わからない場合は事務局にお問合せください。

審査について

NPO内部の学術科学委員会および活用委員会のそれぞれの審査委員で構成される審査会を経て、採否を決定いたします。
また、審査・選考にあたり、事前ヒアリングをさせていただく場合もありますので、その場合はご協力をお願いいたします。

審査結果について

審査結果は、平成23(2011)年3月中に各申請者に書面で通知するほか、採択された計画についてはHPで公開いたします。

ご支援ください

NPO法人富士山測候所を活用する会の活動は、皆さまからの会費、ご寄付によって支えられています。

会員を募集しています

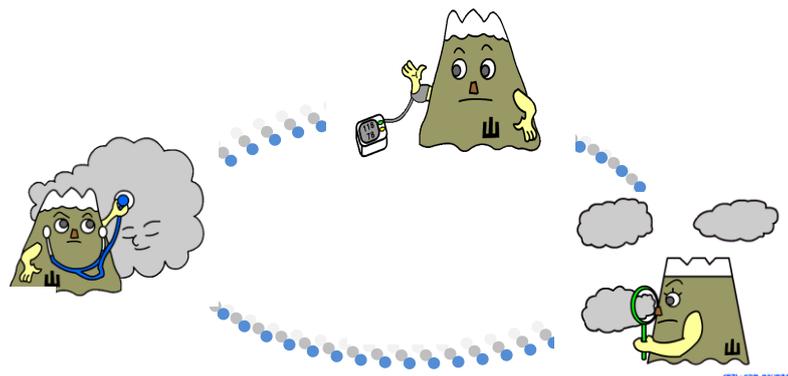
会では、活動趣旨にご賛同していただける方のご入会を募集しております。
NPO法人富士山測候所の目的に賛同し入会をご希望される団体または個人のかたは、当会のHPから入会申込書をダウンロードし、必要事項をご記入のうえ、事務局宛にFAXまたはメールでお送りください。
折り返し、年会費払込取扱票をお送りしますので、お振込をお願いします。お振込確認後、会員登録をさせていただきます。
ご支援をよろしくお願いたします。

	個人	団体
正会員	1口1万円	1口2万円
賛助会員	1口3千円	1口1万円

ご寄付をお願いいたします

本会の目的にご賛同してご寄付をさせていただける団体または個人のかたは、お手数でもHPから寄付金申込書をダウンロードし指定口座までお振込みのうえ、必要事項を記入し事務局宛にFAXまたはメールでお送りください。
なお、寄付金はご返還いたしませんことをご承知ください。

	個人	団体
寄付金額	1口1万円	1口10万円



編集・発行 広報委員会



特定非営利活動法人
富士山測候所を活用する会
Valid Utilization of Mt. Fuji Weather Station

〒102-0069 東京都千代田区麹町 1-6-9 DIK 麹町ビル901
TEL:03-3265-8287 FAX:03-3265-8297
E-mail: npofuji3776@yahoo.co.jp

フォント協力: ★Heart To Me★(沙奈)